山と花のたより　135号

２０１１年６月１２日　松尾

メールアドレス　tadashi6414@smile.ocn.ne.jp

高校時代からの友人たちと谷川山系を歩く ①

６月６日群馬県高崎市に高校時代の地学部仲間が集まった。配偶者２人を入れて８人。目的は谷川岳と平標(たいらっぴょう)山の登山。

10 人乗りレンタカーを走らせて湯檜曽温泉の湯の陣に宿泊。大きなホテルだが、長く続く不況で方針を切り替えたのだろうか、2 食付 6800 円で夕食、朝食ともにバイキング方式。

天神尾根から万太郎山、仙ノ倉山方面を望む

山登りが目的の私なんかには格安料金は有りがたいのだが、女性たちはどう思っただろうか。プラン作成者の悩ましい問題だ。

写真上シラネアオイ

翌７日、ロープウェイとリフトを乗り継いで標高 1500mの天神山に下り立つ。足元に花が散在、奈良の二上山ではすでに散ってしまったショウジョウバカマがやっと花を開こうとしている。

登山路を進む。カタクリ、シラネアオイ、イワカガミ、ツルキジムシロなどが足元を飾れば、頭上にはコブシ、オオカメノキの白い花が新緑の中でひときわ際立っている。

登山路は険しい鎖場をいくつか折り込みながら、着実に高度を稼せいでいく。花は切れ目なく道の両端に姿を見せる。キスミレ(写真左下)がスミレにしては大きな葉と共に、路傍の斜面を覆って照り輝いている。現地で「オオバキスミレ」と説明したが、谷川岳のはその一変種でナエバキスミレ(苗場黄菫)というそうだ。オオバキスミレはシラネアオイと共に主として日本海側多雪山地の植物だ。

一行の一人がツバメオモトを見つけた。光沢のある厚い葉の間から花茎を伸ばして白い花を開いている。花はしっとりとした質感をもち上品。艶やかな幅広の葉と一体となって見る者に好ましい印象を与える。

ツバメオモト（ユリ科ツバメオモト属）

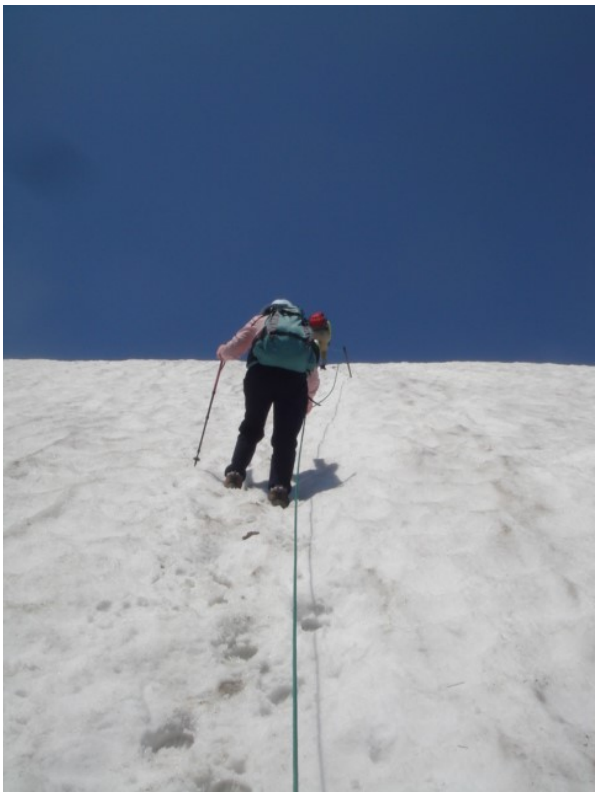
ツバメオモト（燕万年青）については忘れられない思い出がある。ひとつは何年か前、谷川連峰の北にある巻機（まきはた）山で道に迷い、2 日間孤独な薮漕ぎをした時、しばしばこの花に出会い、慰められ、励まされたのだ。季節柄他の花も沢山咲いていたがこの花にこそ慰められたと思っている。

もうひとつは 20 年ほど前の 8 月北海道支笏湖湖畔の温泉宿に泊り、早朝暗いうちに恵庭岳に登った時のこと。登山口からしばらくはこのツバメオモトの群落の中を通った。花期はすでに終わり、光沢のある藍色の実が長い茎の上で揺れており、この植物の名前の由来として聞いていた「実がツバメの目にそっくり」を実感しながら歩いたのだ。「ツバメの頭部を連想」説より「目にそっくり」のほうが納得できる説だと思った。

イワウチワ（イワウメ科）

話が横道にそれたが、一行のうち体調不良の男性一人が熊穴沢避難小屋で引き返し、残りは頂上を目指す。ムラサキヤシオが目立ち、満開のシャクナゲの向こうに谷川連峰の峰峰とそれらを結ぶ吊尾根とが雪を抱き、絶壁を従えて聳えたち、登頂意欲をいやがうえにも募らせてくれる。

行く手に白い壁が見え始めた。紺碧の空とのコントラストが眼に痛いほどに鮮やか。肩の小屋手前の急傾斜雪面なのだ。



雪面の取り付きで息を整え、「もうすぐ頂上」の声に励まされて登り始める。右手でロープを手繰り、左手のストックで雪を確実に捉えて、つま先を蹴込みながら一歩一歩登る。

雪の斜面を登りきると肩の広場に飛び出る。小屋がありベンチが設置してある。先ほどまで見上げていた吊尾根が眼下に見える。

そして頂上へ。双耳峰（そうじほう）の南のピークがトマノ耳と呼ばれて山頂となっている。他の片方がオキノ耳だ。360 度の眺望。いずれの方角にも雪と岩とを光らせて、名だたる諸峰が聳えている。「登った者のみが甘受できる幸せ」と誰かが呟く。今年度多くが古稀となる参加者たちに心からの拍手を贈りたい。135 号完